

本稿は第一に源氏物語中の引歌「むべも心あるあま」をめぐっての正子と藤壺の諸問題を、第二に正子と東宮恒貞についての考察を目的とするものである。なお末尾に系図を付した。

# 一 引歌「むべも心あるあま」の諸問題

「賢木」で藤壺の出家後、源氏が三条宮で勤行に励む藤壺を訪問し、「むべも心ある」と小声で口ずさむ場面は後撰集雑一の素性作とされる「音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまはすみけり」が源氏以来引歌として指摘されている。そのことに異論はないが、この引歌にはわかりにくい点がいくつかある。次に挙げてみる。

① 詞書の「西院の後、御髪おろさせたまひて、おこなはせ給ける時、かの院の中島の松を削りて書きつけ侍りける」の西院（淳和院）の後正子の出家時期はいつなのか（それによって、出家の動機が夫の淳和帝崩御に殉ずるものか、息子恒貞の東宮廃位によるものなのかの見当がつく）。② 歌の作者は素性、遍照、真静のいずれなのか。さらに上記に関連して、この歌は正子の出家後まもなく詠まれたのか、後に回想として詠まれたのか。

③ 本歌と源氏物語での引かれ方の重なる点とずれる点、さらにこの引歌が物語に及ぼす効果をどうとらえるか。

一では特に③を中心に論じたい。即ち、本歌は後撰集雑の部に入っており、内容的には淳和太后正子の出家生活を賛美する挨拶の歌である。

## ① 正子の出家時期

『続日本後紀』『日本紀略』ではともに正子の出家を承和九年（八四二）十二月五日「淳和太后崩落入道。」（紀略は「剃落入道」とする。嵯峨上皇崩御が同年七月十五日、承和の変が同七月十七日、恒貞廃太子が同七月二十四日である。恒貞が東宮を廢された約四ヵ月後に正子は出家したことになる。一方、『三代実録』の正子崩伝では「承和七年五月淳和太上天皇崩。皇太后落髮為尼。」と、淳和上皇の崩御記事に続けて正子の出家を記している。これだと承和七年の夫の死に殉ずる出家とされる。だが当然、成立の古い方の国史『続日本後紀』の記述に軍配があるろう。『続日本後紀』の最終撰者は良房と春澄善繩であった。善繩は恒貞の東宮學士であり、恒貞の東宮辞讓の表も書いている（『恒貞親王伝』、『三代実録』貞観十二年二月十九日）。ゆえに承和の変前後の記事は正確であると思われる。

また、実際の筆削を担当した善繩は良房に庇護を受けた身として、良房の意に忠実であったといわれている（注2）。正子の出家に関して事実のみを最小限に記したことが、逆に真実味を感じさせる。良房にとつては良心の痛む出来事で、あまり詳しく書きたくない事項であったのだろう。となると、正史でありながら『三代実録』は正子の出家時期を事実を枉げて記述したことになる。坂本太郎氏は『三代実録』の正子崩伝について「心をこめて太后（正子）の徳を讃え、恒貞の廃太子事件について『太后震怒し、悲号して母太后を怨む』と、嵯峨太后嘉智子に非があったような書き方をしている。藤氏を憚った利巧な書法である」（注3）と述べるが、正子の出家も同様に、「黒幕の中心は良房であった」（注4）承和の変の起こった承和九年と明記するのを避けたのであるうか。藤原氏の強引な策略によって東宮恒貞を廃位に追い込み、その失意が母正子の出家につながったという印象を与えまいとしたと推測される。『続日本後紀』以降、国史は藤原氏北家摂関流で独占する体勢が出来上

一方、源氏物語では五例とも（後述するが源氏と藤壺との贈答に計四例、源氏が空蟬に対して一例ある）、男女の恋心がこめられている。特に藤壺との四例は表向きは後撰集と同様に雑部の挨拶風の体裁をとりながら、当人たちにだけ通い合う男女の深い思いが重ねられている。だが本歌の後撰集作者（素性にせよ遍照にせよ）と、西院（淳和院）の後正子の間には男女の恋愛関係はありえない。出家した高貴な后腹内親王の先帝后を賛美する社交的な一首である。また、非の打ち所のない出自でありながら、いわゆる承和の変で息子の東宮恒貞を廃太子とされた悲憤を慰撫するとき口物も伝わってくる。いずれにせよ後撰集歌に恋の要素はないと断言できよう。

一方、源氏物語において源氏が藤壺に発する本歌の引歌には、ぎりぎりに抑制してなお消し去ることのできない恋慕の情が存在すると感ずる。また正子と異なり、藤壺も自らを「松島に年ふるあま」と称する返歌を源氏に贈っており、俗体のときには警戒して見せなかった源氏への素直な情愛を示している。源氏と藤壺がこの引歌を使用する時、雑の部を恋の部にという源氏物語独自の「ずらしの引歌」の仕掛けが働くと考え（注1）。ちなみに後述するが、本歌を引歌とする他作品は多数あるが、源氏物語のとき「雑」から「恋」（表面的にはカモフラージュしているが）への「ずらし」は基本的に見られない。「松が浦島に情趣豊かなあま（この場合は海女か）が住む」という皮相的な取り入れ方をした歌ばかりが後世に量産された感がある。この点から見ても源氏物語の引歌の独自性は突出している。

なお、あまは本来漁業に従事する「海女」を指すが、同音の「尼」とかけて詠まれることも多い。本稿で注意すべきは、本歌の正子と藤壺は実際は「尼」であるのに、「海女」にたとえられ、後代和歌の多くは單純に「海女」そのものが詠まれている場合が多い点である。以下、冒頭に掲げた疑問点を順次検討する。

がり、『三代実録』の総裁も藤原時平なので、このような記述になったかと思われる。しかし、現在では正子の承和九年出家説が大半を占めている。となると、桐壺帝一周忌に合わせた藤壺の出家との重なりは薄くなってくる。が、これは表面的な解釈で、藤壺の出家の本音は息子冷泉の東宮位を守り、即位を実現させることであった。正子の方も、恒貞が東宮位を剥奪されたことへの失意と、その後の恒貞の人生を少しでも内容あるものにするための恭順の意を示すものだったと受け取れる。そう考えると、子どものための捨て身の出家という点で、やはり両者に通ずるものはある。

ただし、藤壺出家時の冷泉は六歳のいたいけな幼児であった。藤壺出家の話聞いて「式部がやうにや。いかでかさはなりたまはん」（賢木二の一一五）と、幼い年りの想像力を働かす場面は印象的ではあるが、実際のところは理解できない年齢である。一方の恒貞は十八歳すでに二人の男児の親であった。自身が廃太子となった数ヵ月後の母の出家及び尼姿から受けた衝撃の深刻さには大きな差があったであろう。

また、勝浦令子氏に「八、九世紀は母子関係を中心とした家族結合を反映して、子を亡くした母の出家が多く、夫を亡くした妻が出家する例はほとんどなく、十世紀ごろから見られる」（注5）との指摘がある。これは正子九世紀と藤壺十世紀（延喜、天曆の時代設定とした場合）の場合とも重なる。もっとも恒貞は亡くなったわけではないが、仁明崩御二日後の母嘉智子の出家（注6）の例や、文徳崩御後の母順子の「后哀働柴毀。後遂落彩為尼。」（『三代実録』貞観十三年九月二十八日の順子崩伝 注7）出家はまさにこの説の通りである。

さらに勝浦氏は「妻が出家した場合、夫との婚姻関係は解消された」が、「出家によって親子関係は解消されないと考えられた。出家した親が子どもとは縁を切らずに子どもの面倒を見ている例も多くあった」と述べる（前同）。尼となった公任室が公任とは同居せず、教通の二条邸で故公任女の残した子どもたちと居住している（『栄花物語』衣の玉）

例や、明石の尼君と明石の君母子、女三の宮と薫の例などが想起される。もっとも最後の例は、子どもが尼姿の母を氣遣うという性格が強いが。

正子の出家について付け加えたいのは、その姿勢や内容が本格的なものであった点である。正子が尊崇していたと思われる慈覚大師円仁は、死に際して弟子たちに十三箇条の遺戒を残した。その最後の条は正子の希望する菩薩尼戒壇を実現させるようにという内容である（注8）。貞観二年（八六〇）五月七日、円仁によって菩薩大戒を授けられ、良祚と法名を与えられた正子だが、前後して清和天皇も、文徳帝母順子も円仁によって同じ菩薩大戒を授けられている（注9）。当時の流行のようなものだったのである。だが、十三箇条中で、貴顕の信者として円仁が氣にかけて名を挙げているのは正子だけである。正子の不運な境遇を円仁が思いやる部分も当然あったであろう。それと同時に正子の仏道への真剣な思いを汲み取っていたのであろう。正子は高僧をも動かす貴族のようなものを秘めていたと思われる。

## ②後撰集歌の詠歌時期と作者について

本歌の作者についてはいまだに定まらない。素性説とその父の遍照説及び素性と字体の似た真静説がある（注10）。が、素性説の元となる後撰集も、ひとつ前の歌が素性作であることから作者名の入っていない一〇九三番歌も素性作とするいうもので、決め手としてはやや弱い。次に詠歌時期を考察する。①で述べたように、正子の出家時期は承和九年（八四二）十二月五日である。詞書の「御髪おるさせたまひて」を素直にとると、その頃の作ということになる。そうなると、素性は、歌の詠めない幼年（兄由性は『本朝皇胤紹運録』の没年延喜十四年（九一四）七十四才から逆算して承和八年（八四二）生まれなので、素性はそれ以降の誕生）で素性説は成立しがたい。素性説をとる後藤祥子氏は、「素性の歌人としての活躍時代と考えてよく、皇后の晩年に属すること

になる素性の関わり方からいえば、正子像は宮廷貴顕の一人というより反権力な者に近い」（注11）とする。が、本歌の詞書「御ぐしおろさせたまひて、おこなはせ給ひける時」から受ける印象は、正子の晩年に出家直後を回顧してという感じではない（詞書部分は後人の書き入れとすると、この説も成り立つが）。出家剃髪後何十年も経過してこのように書くのは不自然な感じがする。やはり、承和九年からその年月の経ってない時期の作とする説を今のところ私は支持したい。また真静は古今集に二首入集しており、河内の人で御導師であったというが正子との接点は見出しにくい。となると、時代的には遍照が残る。但し、遍照の出家は仁明帝崩御の嘉祥三年（八五〇）で、出家以前の作は拾遺集などでは良峯宗貞名で伝わっている。が、『遍照集』では、在俗時の歌も特に良峯宗貞と表記されることなく入集しているので、遍照作をとる場合も同様の立場に基づく解釈する。以下遍照作とするひとつの仮説を示してみる。

正子と遍照は共に桓武天皇を祖父とする従姉弟の関係である。出家以前の良峯宗貞（遍照）と正子の交流は、遍照が在俗時から極めて親密であったとされる光孝帝を接点になると一応成り立つ。即ち即位前の時康親王（光孝）を「仁寿太皇太后（正子）甚親重之（時康）。毎有遊覧譚会之事。太后必請令為之主」（『三代実録』元慶八年二月）とあり、風流な親王であった正子の甥にあたる時康は、正子主催の宴席にいつも招聘されていたらしい。時康は天長七年（八三〇）生まれで、正子より二十二歳下、遍照より十五歳下、恒貞より五歳下である。承和十二年（八四五）二月十六日に十六歳で人康親王と一緒に清涼殿で元服している（『続日本後紀』）。正子の出家した承和九年十二月は、十三歳である。源氏物語「賢木」でも、殿上童の八、九歳の頭中将の次郎君が、韻塞ぎの負態で美声を披露して賞賛されている。元服前の少年でも芸達者であればお呼びがかかったのであろう。西院での母子の失意の暮らしの中で、正子は恒貞の気持ちを引き立てるためにも、「性多風流」と評される時

康親王をしばしばよんだのであろう。淳和院の暮らして正子主催の「遊覧譚会」が催されたことは光孝帝即位前期の記事にのみある（元慶八年二月『三代実録』『日本紀略』）。

そこで、遍照だが、『三代実録』光孝天皇条からは遍照と光孝帝が帝の若い時分から極めて親密な関係にあったことが窺える記事が散見する。仁和元年（八八五）遍照を僧正にし、同年十二月、遍照七十の賀を天皇自ら主催し、その夜は「天皇慶賀、徹夜談賞」するという親愛の情を見せている。目崎徳衛氏は「光孝はおもいがけない当極のかげに遍照の護持僧としての力があつたこと、『未及落飾』の時から深い交わりがあつたことを仁和二年三月に食邑百戸を賜い、輦車での宮門を出入許可の勅に書いている。一方遍照も仁和元年二月の上表で『遍照昔陛下竜潜之時、陪蕃邸而委質。』と、出家以前に時康親王に仕えていた、委質（質は贅）の語は公的関係でなく、私的に早くから近似していたことを意味する」と指摘する（注13）。目崎氏によると、二人の竹馬の友的親交の理由は遍照の母と時康親王の関係にあるという。即ち遍照母は、時康親王の乳母であったのではないかと推測である。時康親王が布留滝を訪ねた時に「遍照が母の家にやどり」をしたという古今集二四八の遍照歌などからの説である。以上の点から考えて、元服前の時康親王は年長の兄のような宗貞に同伴してもらって淳和院に行くことがあったのではないか。その際に出家前の宗貞が正子に対して本歌を詠んだとは一応言いうるであろう。しかし、この推測を裏付ける史料は今のところない。以上の考察から端的に私自身の結論を述べると、素性、遍照、真静のいずれとも決めがたく、むしろ詠み人知らずの伝承歌のようなものと見るのが最も穏当ではないかと現時点では考える。

## ③後撰集本歌と源氏物語引歌の重なりとずれ

この点に関しては、まず源氏物語中の用例を検討し、次に源氏物語以

外の本歌の引歌と比較しつつ考察してゆきたい。

## 源氏物語中の用例

A（源氏→藤壺）「むべも心ある」と忍びやかにうち誦じたまへる、またなうなまめかし。

Bながめかるあまのすみかと見るからにまづしほたるる松が浦島

（A B賢木二の一三六）

藤壺は桐壺帝の一周忌に誰にも相談せず出家を敢行した。その翌年の正月に源氏は勤行に励む三条宮に年賀に参上した。その室礼は昔とは様変わりして、鈍色など出家者の色彩であった。源氏は感極まって後撰歌の四句目「むべも心ある」を口ずさみ、さらに三条宮を「松が浦島」にたとえ、そこで尼となった藤壺が物思いに沈んでいることを察すると自分も涙がこぼれると一首（B）よみかけた。

## C（源氏須磨から藤壺への文）

松島のおまの苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたるるころ

（須磨二の一八九）

須磨に謫居中の源氏は長雨の季節に人恋しさも募り、京の女君たちに文を出した。その中の藤壺あての一首である。Bの源氏自身の歌を踏まえている。後撰歌は詞書にあるごとく、西院の中島の松を削って書きつけた歌というところから「松が浦島」という陸奥の歌枕を引き寄せている。源氏の一首は、本歌から藤壺が出家生活を送る三条宮を「松島のおまの苦屋」とたとえる。さらに「須磨の浦人」と卑称した源氏自身は、それが架空の呼称ではなく、現実に須磨流謫の身である点が、行平のイメージをもだぶらせて抜き差しならぬ印象を与えている。

D (C源氏への) 藤壺の返事

御返りもすこしこまやかにて、「このごろはいとど」

しほたるることをやくにて松島に年ふるあまも嘆きをぞつむ

(須磨二の一九二)

従来引歌指摘は少ない(源氏物語事典が指摘)が、Cの源氏の贈歌をふまえて応じているので、当然本歌が念頭にあったはずである。

ところで、本歌には正子の返歌はない。そもそも母の嵯峨后嘉智子と異なり(注14)、正子の歌は一首も伝わっていない。が、藤壺は源氏の自分への比喩をそのまま使って「松島に年ふるあま」と、自らの生涯を正子に重ねた歌を詠んだ点は注目すべきである。日向一雅氏が「藤壺の返歌は源氏の問いかけに身を寄せるように、源氏と同じ嘆きを共有する心を詠むのである。これは見事な唱和である」(注15)と解する通りであろう。出家前は源氏の接近を極度に警戒して、源氏を喜ばせるような好意的表現は極力抑え続け、返歌さえ稀であった藤壺が従来より「すこしこまやか」な返歌を詠んだ。CDの贈答はやはり二人だけに通ずる男女の相聞歌ととらえられよう。同時に贈答のあった臘月夜の返歌には「浦にたくあまだにつつむ恋ならばくゆる煙よ行く方ぞなき」と、「恋」の語が入っている。また紫の上の返歌は「浦人のしほくむ袖にくらべみよ波路へだつる夜の衣を」で、下の句は夫婦関係の途絶えを嘆く表現である。両首とも誰の目にもそれとわかる男女の相聞歌である。CDとの位相の違いは明らかである。恋の歌でない後撰歌を引いて、周囲に決して気付かれないようにしながら源氏と藤壺は呼応しあい、二人の心の距離は縮まったのである。

なお、藤壺と源氏の歌の贈答はこれが物語中で最後である。そもそも「須磨」以降藤壺は殆ど歌を詠まない(「絵合」での唱和一首のみ)。E(源氏↓空蟬)「松が浦島を遙かに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの睦びは、絶ゆまじかりけるよ」(初音三の一五六)

三九〇浦波の昔のあとのしるければ尋ねてきつる心あるらし

三八九番歌詞書の「一品の宮」は村上天皇第九皇女の資子内親王である。母は中宮安子。父帝に鍾愛され応和二年(九六二)三月、八歳の時に「資子内親王歌合」が開催されたが、実質的な主催者は当然村上天皇であったといわれている(注16)。同腹の弟円融天皇とも仲が良く、天禄三年(九七二)三月二十五日、十八歳の時に資子の居た梨壺で円融帝も臨御して藤花の宴があり一品に叙された。寛和二年(九八六)三十二歳で落飾し尼となり、三条院に住んだ。長和四年(一〇一五)四月二十六日没。六十一歳。当連作は後半の三九六番歌の詞書「斉信の少将」により、寛和二年(九八六)から永延三年(九八九)の間の歌とわかる。

作者公任は二〇から二三歳である。資子は結婚した形跡はなく、いわゆる皇女独身を理想的な形で貫いた一生であったと思われる。ゆえに淳和帝との間に複数の子を受け、子に先立たれる逆縁の辛さも味わい(注17)、長子恒貞の東宮廃位という悲劇に遭遇し出家した正子の生涯とは相違点も多い。同様に藤壺のごとく帝位に関わる男女間の秘事も無縁であったろうことはいうまでもない。若かりし公任は、妻の父昭平親王の妹で、出家後間もない資子の三条院を訪問して「松が浦島」と口ずさんだのである。後藤祥子氏は三八九番歌詞書を「内親王を心ある尼(奥ゆかしい出家者)だと賞賛した」とし、三九〇番歌の公任返歌「昔のあと」を「由緒ある(正子内親王当時の)昔」とする(注18)。小町谷照彦氏は資子の三条院を「風雅な雰囲気があつて、殿上人たちが参集していたようである」と評し、この一連の贈答を「無常や厭世が詠まれているが、入道宮にちなんだもので、女房たちとのあいさつ的な贈答だからさほど深刻なものではない」とする(注19)。資子の生涯は正子のごとく悲劇的な出来事はなく、人生の辛酸をなめる体験もしていないので、このような解釈が妥当なのであろう。

また、連作の後半三九七番歌にある斉信少将あての詞書「その夜もろ共にもものしける人に、かくなん有しといひやりけるつるでに」からは、

新春、源氏は二条東院に空蟬を訪問した。既に出家したその居所は経巻や仏具なども風情に富んだ優美なもので空蟬の行き届いた心遣いが感じられた。源氏は本歌二句目「松が浦島」を引いて、「あなたとは男女の契りを交わさず、遠くから憧れて眺めている関係にとどめておくべきでした。そうだったらこれほど苦しまずにすんだのに。出会った当初から思い通りにならず辛い仲なのでした。それでも、こうしてお世話して時折ご訪問する程度の関わりは絶えるはずがないのでしたよ」と訴えた。このEも、本歌の「高貴で優美な尼に憧憬の念を抱く作者が御簾の外側から賛美する」という内容とは明らかに相違する状況で反実仮想的に引かれている。「空蟬」で源氏と人妻の空蟬は割りない男女の関係になつたがゆえに、源氏は後撰歌のように胸の痛みを伴わない風流な挨拶の歌を詠みかけることはできないのである。但し、空蟬は藤壺と異なり、正子との身分的な重なりはない。が、源氏物語でこの引歌の使われる二女性には共に本来の「松が浦島の心あるあま」とは異なる造型である点を押さえておきたい。次に源氏物語以外の引歌の例をみていきたい。

#### 源氏物語以外の本歌の引歌について

もう一人の「心あるあま」資子内親王

源氏物語以前の引歌の例は意外に少ない。というか管見では次の『公任集』の連作(三八九番から三九八番)のみである。だが、この用例は本稿のテーマにとって重要なものである。連作の一首目の詞書にまず引かれている。

「月のあかりける夜、一品の宮に殿上人あまた参り給ふるに、口すさびに『松が浦島』との給ひたりけるをききて、内の人」

三八九波だにもよることかたき浦島をいかでかあまのあるなしをしる「返し」

公任と一緒に資子サロン訪問をした友人に、その女房との後朝のやりとり(実際は逢わずじまいだったらしい)を吹聴せずにいられない若者の興奮が伝わってくる。源氏物語でいえば、「おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえ」があり、「をかしういまめきたること多く」(葵二の五三)する六条御息所の周辺で、「朝夕の露分けありくをそのころの役とする」(同)風流好みの公達の間である。また資子のすぐ下の妹選子内親王の「大齋院サロン」も同様に式部の時代に高貴な男たちが気取って訪問する高名な風流サロンであったことは『紫式部日記』で周知の事実である。但し、資子、選子ともに独身であった点は正子、藤壺との最大の相違点であろう。

公任は承和の変(八四二年)から一五〇年ほど経った頃に「皇女不婚」を体現したような后腹内親王資子の出家生活の賛美に正子を詠んだ後撰歌を引いたのである。この公任の三条院訪問は「栄花物語巻第十二・玉のむら菊」でも語り継がれる有名なエピソードとなっている。一条天皇の父円融天皇の姉資子は、一条天皇の母詮子を(遵子よりも)最厚にしたので、一条サロンでは恩義ある近しい人物であったのだ。それゆえ、公任が資子を「松が浦島(の心ある尼)」になぞらえた話は紫式部の仕えた一条中宮の彰子サロンでも有名であったろうことは想像に難くない。ただ、正子と東宮恒貞の承和の変をからめた引歌の使い方は、冷泉の東宮位剥奪の危機に怯える源氏物語の藤壺の例だけにみられるもので、後世の引歌には全く受け継がれていない。時代順に考えると後撰集↓公任集↓源氏物語なのだが、正子の人生との重なりは資子より藤壺の方が多いといえよう(相違点もあるが)。やはり、式部が『日本紀』(六国史)などを精読していたことの表れであろうか(注20)。

#### 源氏物語以降の引歌

次に源氏物語以降の本歌の引歌をいくつか紹介する。十一世紀から十

三世紀の作で、「松が浦島」と「心あるあま」の組み合わせの歌にしばった。

・待賢門院堀河集 四五「海のほとりのおつる葉」

①心あらばあまもいかにかおもふらんもみぢちりしく松が浦島

・師光集 二「霞の心を」

②心あるあまのすみかのいかならん霞こめたる松が浦島

①②ともに「松が浦島」のあまは、とりわけ情趣を解する者と名高いのだから、紅葉や霞といった風情ある自然現象をじっくりと味わっていることと思いをはせる歌である。

・千五百番歌合 一三八八番 二七七六 左 讃岐

③心あらばゆきて見るべき身なれども音にこそきけ松が浦島

・拾玉集（慈円） 一四九九 詠百首和歌「海路」

④心ありて物語せむ海人もがな船漕ぎとめむ松が浦島

・壬二集（家隆） 二八九「寄名所恋十首」

⑤おもひわび松が浦島たづねみん心あるあまやなぐさむるとて

・新勅撰集 第十九 雜四 一三一六 題知らず 祝部成茂

⑥心あるあまのもしほ木たきすてて月にぞあかす松が浦島

③④は一読すれば歌意が通ずる。次の⑤の詞書に「恋」の語が入っている。が、行き詰まった恋の苦悩を「心あるあま」に慰めてもらおうという歌で、あまへの恋の気持ちを秘めていない点が源氏物語とは異なる。⑥は「松が浦島」のあまは余所と違つて情趣を解するあまなので、月の美しい今夜は藻塩を焼くことに精を出さず、月を觀賞して明かす、という歌である（神作光一、長谷川哲夫『新勅撰集全釈七』参照）。

①から⑥までを通して言えるのは、後撰集、公任集、源氏物語では「あま」の語に高貴な尼（正子・資子・藤壺）の存在があったが、後世のものは松が浦島には情趣を解する「海女」が住んでいるという単純な内容に変わってきている点である。これはここに挙げた例だけでなく、国歌大観を一覧しても同じといえる。源氏物語の当引歌の内容の複雑さ、

高度さを改めて思い知らされる。次に「心ある」の内容をそれぞれ確認しておきたい。

#### 「心あるあま」の内容の識別とその変遷

「心ある」の中身は正子・資子・藤壺・後代和歌の海女たちでは違があると感じる。現行の注釈では全てを「情趣を解する」としているが、それぞれ識別すべきであろう。「心ある」は辞書類を調べるとおおよそ次のように分類できる。①他に対して暖かい思いやりがある。②良識を持ち、思慮分別がある。③情趣を解する。④意図的な気持ちを持つ。⑤歌論や連歌論の用語。今一度それぞれを検討してみる。

後撰歌は表面的には③だが、正子の人柄や出家の事情を考慮すると、②が根底にある③といえよう。同様に藤壺の出家に際して源氏が引いた「心ある」も、本音は③よりも②の藤壺の思慮深さへの感嘆であろう。ところで『日本国語大辞典』は、「心あり」の反対語「心なし」の意味の三番目に、「（出家者は）俗世から離れ喜怒哀楽の情を持たない」として、用例に西行の「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ沢の秋の夕暮」をあげている。となると、出家した藤壺や正子を情趣を解する「心ある尼」とする賛辞と矛盾する。これに関して筆者が西行歌の「心なき身」の解釈を検討した結果、久保田淳氏が諸説を一覧した上で「西行は謙遜してこのように歌った」のであり、「法師の境遇との関連からの自己否定」と解するのは「近代的な受け取り方」と結論付けている（注21）。今、久保田説に従って、出家者と「情趣を解する」ことが、必ずしも相反することでないことを付け加えておく。

次に、公任が口ずさんだ資子の場合には③が主になると思われる。さらに後代和歌の「心ある海女」たちは全て③のみになっている感がある。さらに『日本国語大辞典』（「心あり」の反対語「心なし」の語誌）によると、「心なし」は、情緒面・精神面での欠点だけでなく知性面での

輦と、手で腰に支える腰輿の二種類がある）に乗るのは「天子は至尊におはしませば車には乗御せず」という天皇および皇后・齋王に限るとある。また同書「輦車」（輦に車のついたもの）には「皇太子の晴の儀は輦車なり」とある。皇太子の母太后への正式な行啓は（途中で牛車に乗り換えずに到着まで）輦車を用いるのが正式であったのだろう。東宮は行啓に牛車を用いることもあったらしいが、その際は糸毛や唐車などの豪奢なものであったと思われる。『栄花物語 根あはせ』には寛徳二年（一〇四五）正月十六日に、東宮（親仁）が「糸毛の車」で参内し、後

朱雀天皇から位を譲られて後冷泉天皇として踐祚した後に「御輿」（鳳輦）で還御したとある。恒貞が（粗末な）牛車に乗って淳和院に移ることを予見する童謡が『続日本後紀』と『三代実録』恒貞薨伝の両方に採録されている（注22）。その一節に「玉兒牽裾の坊に牛車は善けむや」（東宮坊に牛車はよいのだろうか。東宮の乗り物にはふさわしくなからうの反語的表現か）とある。ここでいう牛車は、高貴な身分の者に不似合いな種類であったことが推測される。廃太子となった恒貞が乗ったのは、やつれた網代車か或いはさらに身分の低い者の乗る蓆張の車、木の板柁を張った板車でもあったかと思われる（注23）。恒貞の悲運は避けられないことだと世間も予想していたということだろうか。藤原北家の強引な廃太子政策を世論も納得のこととの印象を与えるためにこの童謡を繰り返し記載したとも考えられる。粗末な牛車で母の元に戻った恒貞を迎えた正子の胸中はいかばかり無念であったろう。

ところで、正子の母嘉智子と、その息子の仁明帝に輦をめぐって対照的な挿話がある。嘉祥三年（八五〇）正月四日の朝餞行幸の際、嘉智子が仁明帝の輦に乗る様子をまだ見たことがないので、是非見てみたいと切望した。それで、仁明が嘉智子の眼前で、天皇の晴れの儀式の乗り物である鳳輦をさし寄せて乗ってみせたというものである（『続日本後紀』）。嘉智子にとっては仁明帝も正子も嵯峨天皇との間の実子であったのだが、息子の仁明を偏愛していた感がある。というより、同じ孫であ

欠点をさすことも多く、ほぼ同義語とされる「情けなし」より非難の度合も強いとある。これによって「心ある」が知性を土台としていることが確認された。以上を視野に入れて、それぞれの「心ある」の内容を以下のようにまとめた。

先述したように、高僧円仁の遺言にまで記された正子の仏心や、源氏の恋慕を封じつつも冷泉後見の最大の協力者としての自覚を促し、また異朝の故事にまで通じていた（紅葉賀）藤壺の教養は、まさに知性を兼ね備えた意味合での「心ある」と形容されるのにふさわしいといえよう。この二人以外の「心ある」は、単に「情趣を解する」というやや皮相的な使い方に終始している点と明確に区別すべきであろう。

#### 二 正子と恒貞

次に本稿の第二のテーマである正子と東宮恒貞について考察する。正子の実像は史料からは見えづらいが、恒貞側の史料と付き合わせる事によって想像できる部分もある。

##### 1 輦と牛車

承和の変の数日後廃太子となった恒貞は、母正子の住む淳和院に移送された。到着時の様子は「即奉謁太后（正子）。及左右皆哽咽悲」であったという『恒貞親王伝』。宮門を出るまでは小車（手車・輦車と同意で、屋形に車を付けて人が引く）で、神泉苑良の角で牛車に乗り換えた『続日本後紀』にある。また『三代実録』恒貞薨伝では「太子駕牛車。出宮中。」となっている。後者だと宮中から牛車に乗ったことになが、史料としては古い『続日本後紀』の方が信頼できる。

松平定信の『輿車図考一』「制度・往古車輿所見事」『古事類苑』所収）によると、輿（車が付いておらず人力で運んだ乗り物。肩に担ぐ



のだが、息子の仁明を偏愛していた感がある。というより、同じ孫であっても、嵯峨帝の異腹弟淳和に嫁した正子の生んだ恒貞より、仁明と順子の間の道康（文徳）に早く即位して欲しかったのであろう。そこに順子の兄良房の付け入る隙もあつたと思われる。源氏物語の弘徽殿と藤壺が、嘉智子と正子にやや重なるが、実母と娘である分、史実の方が小説よりも奇なりという感じがする。

また天皇の乗り物である輦をめぐっては、文徳帝崩御の二日後に「皇太子（惟仁）与皇后（明子）同輦。移幸於東宮。儀同御幸。」『文徳実録』天安二年八月二十九日）の記事がある。先述した『栄花物語』の親仁親王の事例と同様に、踐祚した時点で東宮も輦に乗り、年少であれば母后が同車したのであろう。母后明子と共に輦に乗った九歳の惟仁親王（清和）の様子は天皇の御幸に等しいと評されている。このように輦は最高位の象徴であり、輦に乗るわが子を見ることは母后にしか味わえない誇らしい喜びであつたろう。正子は本来なら恒貞が即位して輦に乗る姿を見るはずであつた。が、その正反對の悲しみと屈辱を味わつたのである。後藤祥子氏が「恒貞・正子母子の置かれた位置は、『賢木』後半の藤壺・東宮母子に酷似している」（注24）と述べるように、物語の藤壺と冷泉にも東宮廃位の危機は迫つたのだが、阿部俊子氏が述べる如く源氏物語では冷泉が即位するという史実との「絶対的相違」が描かれた（注25）。が、作者は藤壺と冷泉には全く異なる種類の苦悩を与えたといえよう。

## 2 廃太子となつた息子の居場所

恒貞は淳和院の東の亭子に居住し、亭子の親皇と呼ばれた『後拾遺往生伝』注26）。そして嘉祥二年（八四九）正月七日無品から三品となつた『続日本後紀』。この年に二十五歳で出家し、法名恒寂と名乗つた『三代実録』。さらに十二年間「行業不退」という本格的な仏道

修行を積み、貞観二年（八六〇）三十六歳で具足戒を受け、正式の僧侶となつた『後拾遺往生伝』。先述したように、母の正子は権力争いの敗者となつた失意の息子の氣を引き立てるために、時康親王など風流才子を招いての宴を盛んにした時期もあつたと思われる。が、恒貞は幼時より聡明で東宮に立つた九歳の時に、始めて紫宸殿で仁明帝に朝覲した様子を「其容儀礼教如老成人」（『続日本後紀』）と評されている。このように早熟で頭脳明晰であつた恒貞の鬱屈を、一時の遊びで紛らすことは無理であつたろう。

恒貞はまた祖父嵯峨天皇の血も引いて九歳で立派な漢詩を作り「当時詩伯菅原清公。滋野貞主等。甚佳賞」し、書道にも秀でていた『後拾遺往生伝』という。このあたり、七歳で立派な漢詩を作つて高麗人に感嘆されたという『うつほ物語』の俊蔭や光源氏に通ずる点がある。本来なら帝位につくはずの自慢の息子が二十五歳で出家（しかも正子の孫にあたる幼い二人の男児と共に）したことは、正子には痛恨の極みであつたろう。その後二十七年間は、共に出家者として、母子は淳和院で寄り添つて暮らしていたと思われる。

しかし、晩年（薨去の三年前）の正子の行動力には目を見張るものがある。僧となつた恒貞が、誇りを失わずに生涯を全うできる居場所を作るべく声を上げたのである。貞観十八年（八七六）二月二十五日に正子は父上皇の居住していた嵯峨院を大覚寺と改めて、定額寺として欲しいという上奏文を若き日の菅原道真に書かせて清和天皇に願ひ出た。この願望は清和帝に承諾され、恒貞その人が大覚寺開祖となつた。恒貞五十二歳の時である。この点を『嵯峨大覚寺』の著者村岡空氏は次のように述べている。「それにつけても哀しいのは母性愛である。なぜなら必死になつて大覚寺の勅許を仰いだ淳和太后の心のうちには、不幸なわが子恒寂の最後のよりどころを嵯峨野に求めざるをえない痛みがあつたからである。このことは勅許を与えた清和天皇はもとより、菅原道真も世人も、そして恒寂ご自身も、よくよく承知のうえのことであつたろう」（注

27）。正子には、このように頼れる相談相手もない厳しい状況の中で、できる最善の策を見出して行動に移し、周囲を動かし実現させるという決してあきらめない強さがある。そして、この点に「賢木」以降の藤壺との重なりが顕著に見られると思う。源氏が出家直後の藤壺を「むべも心ある」と評した本心は、こういう正子と共通する実行力のあふれた毅然とした面を言っているのだと私は考える（注28）。『世づかぬ』内親王のまま出家して、正子のごとき悲憤や、藤壺のような底知れない秘密を抱えた苦悩とは無縁の資子（及びその後詠作された「心あるあま」の類歌）とは大きな隔たりがあるといえよう。

恒貞は皇太子となつてからも、嵯峨・淳和帝が崩ずれば「禍機難測」と想像し、東宮辞退の意を再三示している『恒貞親王伝』。さらに廃太子になつた時は「幸脱重負。豈不可乎。」「後拾遺往生伝』と、退位により重責から解放され安堵したと言っている。時勢に敏感であり、悲観的な性格であつたと思われる。「念仏読経他。略無言語之戯。」「

『後拾遺往生伝』ともいわれており、出家後は或る種の諦観のようなものに達していたようでもある。が、往生伝の類は大体悟りきつたように描くので、内心の藤原氏に対する怒りや、自身の悲運及び母正子への思いなどは本当のところはわからない。但し、その晩年に、母正子が自分に大徳寺を残してくれたことに呼応するような行動をとっている。息子を思う亡き母の心根を恒貞も深く感じ取り、母子の絆は強かつたのであろう。即ち、元慶四年（八八〇）に「太后（正子）遺令」として、母亡き後の淳和院を居場所のない尼たちの拠点にして、淳和院の院号を残すようにと奏言し、同九月四日に陽成天皇に認められて実現している。更に翌元慶五年十二月十一日には淳和院、大覚寺、檀林寺に公卿別当を置くよう奏言し、これも聴きいれられている『三代実録』。自身の薨去の三年前にこのような奏言をし、実現させているのだから恒貞にも正子譲りの実行力があつたと思われる。また、清和、陽成ともに正子母子の願いを断れない世論があつたためとも想像される。

ところで、陽成退位後に基経が恒貞の即位を願つたことが『恒貞親王伝』とそれを引用した『扶桑略記』に書かれている。恒貞はその申し出を峻拒し、その後絶食して往生を遂げたという。権謀術数に翻弄されることにほとほと嫌気がさしていたのであろうか。真の貴種である前東宮のプライドを思い知らされる感じがする。『三代実録』にはこの件は全く書かれておらず、陽成退位から光孝即位への経緯のみが記されている。この件は後藤氏の論文（注29）に詳しいのでそれに譲る。『恒貞親王伝』は漢学者紀長谷雄の作であるが、長谷雄と道真の交友関係など考え合わせると、正子、恒貞母子への漢学者たちの強い同情と共鳴のようなものを感じずにいられない。そして後藤氏が指摘（注30）するように、その精神が源氏物語の底流のひとつとして流れていることも否定できないと思う。恒貞が八歳まで内裏で育つたことや、絵画が趣味であつた点など『恒貞親王伝』のみに記載されており、源氏の生い立ちや、源氏や冷泉の絵画趣味との重なりも感じられ、甚だ興味深い。

## まとめ（藤壺と正子）

最後に藤壺と正子に関しての私自身の結論を述べる。藤壺の内実は、（男女関係で夫帝を裏切っているという苦悩と畏怖、右大臣側に決して知られてはならぬという不断の緊張、源氏の接近を封じつつも冷泉の後見としては結託する必要があるという矛盾）を抱えた困難を極めたものであつた。藤壺はこれらの難題を桐壺帝一周忌の出家という作戦で見事に切り抜けた。その藤壺の尼姿を、他ならぬ源氏が「むべも心ある」尼と評した。これは源氏自身の恋心を封じ込める宣言とも言える引歌表現といえよう。そして皮肉なことに源氏が自身の恋慕を強力な意志で封印したと感知して以来、藤壺は源氏に応ずる姿勢を見せたのである。この後撰集の引歌をめぐつての源氏と藤壺の贈答は他作品には見られない独自の境地に達していると考ええる。

源氏と関わった女性の多くが出家したことはよく指摘されるが、源氏はそのつど藤壺の時の如くきっぱりと男性として迫ることを断念した訳ではない。晩年の女三の宮出家では「なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまへば」（鈴虫四の三二一）と、尼姿の女三の宮に新たな魅力を感じて女三の宮を困惑させている。子まで成した藤壺との男女の縁を断つことは、源氏にとって女三の宮の比でなかったはずである。真相が発覚すれば藤壺も冷泉もまちがいなく政治的に破滅するという危機をはらんだ状況で、藤壺に正子のイメージを重ねることは、源氏との秘事をカムフラージュするという効果をもたらしたのだと思う。正子には不義のイメージは無縁である。后腹内親王の皇后という重なりだけがある。

『花鳥余情』以来、藤壺密通を業平と二条后高子に重ねる読みがあるが、「賢木」から「須磨」にかけては物語の構想上、藤壺に正子を重ねる必然性が生じたということであろう。高子は清和帝入内以前に業平との関係があった（とされる）が、入内後生んだ陽成が即位し国母となる。が、晩年に僧善祐との醜聞で廃后の憂き目を見る。正子は男性問題は全くなく、叔父淳和の后となるも、息子恒貞の廃太子によつて国母にはなれなかった。そして物語の藤壺は、高子より遥かに深刻な秘密を抱えながら、物語中では他ならぬ密通相手の源氏によつて「むべも心ある」と正子のイメージを重ねられたことにより秘事は隠蔽され、誇り高い后腹内親王の面が強調された。さらに冷泉が無事即位したことにより、正子になれなかった国母となることができた。紫式部は自身の長大な物語の中で、現実には決してありえない超難関を越えさせる離れ技の成功を描いてみせた。

さらに、阿部俊子氏は藤壺と正子の相違点として「朝顔」で源氏の夢に現れ解脫からは程遠い男女の愛執に苦しむ藤壺を描いた点が、正子の史実には全くないことを指摘する（注31）。この指摘には私も同感である。作者は冷泉即位が実現したにも関わらず、藤壺に正子にはなかった男女間の重い苦悩をその死後も背負わせたといえる。他方、実在の正

子は、藤原氏によつて失脚させられ苦杯をなめたのに、その後、和歌の中で「情緒を解する思慮深い出家者」という美化されたイメージで描かれるようになった。そこで、二人の共通点として浮かび上がってくるのは次の点である。即ち、二人とも最終的に負け犬にならず、考えをめぐらして出家し、仏教の力を積極的に活用して国母（注32）として崩御後に人々の賞賛を得ることができた。が、二人とも内面に大きな負の部分（正子・わが子の東宮廃位という政治的失意・藤壺・冷泉の父は桐壺帝でなく源氏であるという絶対に知られてはならぬ秘事）を抱えているのに、表面上は「むべも心あるあま」と美化された。我々読者はこの引歌の裏にこめられた深層の苦悩や悲傷をこそ読み取るべきであろう。

#### （注）

1 源氏物語の引歌表現中には、意図的に本歌をずらして二重の意味合いを持たせるものが含まれるという指摘には以下のものがある。特に藤平氏は「定家の本歌取の源泉は、源氏物語の恋部を哀傷に、或いは春の部を夏にという風に、部立を意図的にずらした引歌にあるのではないか」という重要な指摘をしている。本稿も雑の部の本歌を恋の部と重ねて二重の味わいを持たせていると推測する。

- 尾崎知光「本歌と源氏物語表現の二重性」『名古屋大学文学部研究論集 I』昭和二十六年↓『源氏物語私読抄』笠間書院 昭和五三年・山口博「源氏物語の引歌」『源氏物語講座七』有精堂 昭和四十六年・藤平春男「新古今集と源氏物語・定家の本歌取と源氏物語の引歌」『研究と資料 源氏物語と歌物語』武蔵野書院 昭和五十九年・河添房江「引歌・源氏物語の位相」『源氏物語の探求第五輯』風間書房 昭和六一年
- 2 坂本太郎『六国史』（日本歴史叢書）吉川弘文館 平成六年
- 3 坂本太郎『史書を読む』中公文庫 昭和六二年
- 4 注2と同。
- 5 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』山川出版 平成一五年

6 嘉智子出家は『続日本後紀』嘉祥三年三月二十三日「嵯峨太皇太后病に依り入道」とある。また息子の仁明帝が重篤となった嘉祥三年二月十九日「太皇太后、天皇を憂念の余り、悶絶数々」（『続日本後紀』）の記事もあり、母子の強い絆が感じられる。

7 順子出家は『三代実録』貞観三年（八六一）二月二十九日に「皇太后落飾入道」とあり、文徳帝崩御の約二年半後である。だが、夫の仁明帝崩後十一年であることから、夫に殉ずる出家でなかったといえるか。

8 『慈覚大師伝』続群書類従第八輯（伝部）貞観六年（八六四）正月十三日に「召諸弟子。遺戒曰」の最後の項目として次のように記載されている。なお遺戒内容の解説は佐伯有清著の人物叢書『円仁』（吉川弘文館・平成元年）に詳しい。

「頃年伝聞。淳和太皇后欲建立菩薩尼戒壇。是乃道之興隆也。未遇建立。已吾傾逝。吾所作頌揚大戒論。專助護彼 御願也。汝曹以聞。令遂 御願。啓此論而已。」

9 天安三年清和天皇に菩薩大戒を授ける。貞観三年六月、五条の太皇太后（順子）に菩薩大戒を授けたと伝える（『慈覚大師伝』・『三代実録』清和天皇貞観六年正月十四日円仁卒伝）。

10 ★遍照説 木船重明『後撰和歌集全釈』（笠間書院 昭和六三年）・室城秀之『和歌文学大系 素性集』（明治書院 平成十年）

★遍照か真静法師のいずれか説 工藤重矩『後撰和歌集』（和泉書院 平成四年）・片桐洋一『新大系後撰和歌集』（岩波書店 平成二年）

★素性説 『八代集抄』・後藤祥子（注11）★遍照、素性の折衷説 阿部俊子『遍照集全釈』（風間書房 平成六年）

11 後藤祥子「藤壺の出家」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 昭和六一年。また『素性集』諸本の当該歌詞書を一覧しても、後撰集の詞書と大同小異の印象を受けた（蔵中スミ『歌人素性の研究』桜楓社 昭和五五年参照）。

12 承和十一年二十九歳「正月補蔵人」（三十六人歌仙伝・僧綱補任抄

出）。

13 目崎徳衛「僧侶および歌人としての遍照」『平安文化史論』桜楓社 昭和四三年

14 嘉智子の歌は『後撰集』雑部に二首ある。一〇八一「嵯峨后」事しげしはしは立てれ宵の間に置けらん露は出でて払はん」・一一五六同「うつろはぬ心の深くありければこころ散る花春に逢へるごと」前者はまだ嘉智子が皇后になる以前の嵯峨帝との愛の歌。後者も嵯峨帝の変らぬ愛情に満足する歌。

15 日向一雅『源氏物語の鑑賞と基礎知識 2 須磨』至文堂 平成十年

16 萩谷朴『平安朝歌合大成一』「応和二年三月 資子内親王歌合」同朋社 平成七年

17 一文字昭子「皇女総覧五」『瞿麦』四号平成八年に所生の皇子五人（内親王は生んでいない）のうち恒貞を除く四人（夭折二人、恒統、基貞）に先立たれたと年表付きで示してある。

18 後藤祥子「公任集」新日本古典文学大系『平安私家集』岩波書店 平成六年。なお、井伊春樹・津本信博・新藤協三『公任集全釈』（風間書房 平成元年）では「昔のあと」を「公任が以前一品官に通ったことがあったのであろう」と解するが、公任の伝記等からもそのような事実は全く見えず到底納得しがたい。最新の竹鼻統氏の『公任集注釈』（貴重本刊行会・平成一六年）にも『全釈』の解はとられていない。

19 小町谷照彦 王朝の歌人『藤原公任』集英社 昭和六十年

20 田中隆昭「六国史后妃伝と藤壺の宮崩御の記事」『源氏物語の歴史と虚構』勉誠社 平成五年に「藤壺崩御の記事に、六国史の后妃伝の表現・形式がとり入れられている」とある。

21 久保田淳『新古今集全評釈二』講談社 昭和五一年

22 『続日本後紀』承和九年八月十三日「是に先んじて童謡曰。天には琵琶をぞ打つなる。玉児牽裾の坊に牛車は善けむや。辛苜の小苜の華。有職みな言う。童謡虚ならず。」また『三代実録』元慶八年九月二〇日

の恒貞墓伝にも同内容の記述がある。「辛荳の小荳の華」が何の比喩なのか、出典があるのか、調べたが未だ不明である。教えを乞いたい。

23 『政治要略』六七「糾弾雑事 乗車の制」の引く長保二年（一〇〇〇）六月五日の宣旨には「四位網代、五位薦張、六位板車」と身分に応じた車の種類が書かれている。

24 注11と同。

25 阿部俊子「女性の出家入道・源氏物語にみる」『源氏物語の探究』第八輯 風間書房 昭和五八年

26 三善為康撰、保安四年（一一二三）ごろの作とされる。『統群書類従』第八輯・岩波思想大系『往生伝・法華験記』に所収。『恒貞親王伝』を素材としていると思われるが、出家後の恒貞の様子を記す部分は独自である。

27 村岡空『嵯峨大覚寺』朱鷺書房 昭和六三年

28 後藤祥子「藤壺の宮の造型」『源氏物語作中人物論』勉誠社 平成五年に「紅葉賀」出産以降の藤壺の強い母としての描き方を「后腹内親王から中宮・国母の生涯を生きた人の身上」とし、その「意志の強さ」に言及している。

29 後藤祥子「光原氏の原像・皇統譜のゆがみと漢文世界」『王朝文学史稿』21号 平成八年

30 注29と同。

31 注25と同。

32 冷泉帝の母藤壺はいうまでもなく国母であるが、正子は息子恒貞が廃太子となったにも関わらず、崩御の二日後嵯峨山に葬られた記述に「既曰国母」とある（『三代実録』陽成天皇元慶三年三月二十五日）。

付記 源氏物語の本文引用は小学館新編全集による。括弧内に巻数と頁数を示した。また新訂増補国史大系の漢文表記を必要に応じて一部書き下した。傍線は全て筆者による。

略系図

